日本キリスト教団　吾妻教会報

あ が つ ま

2013年イースター号
再発行 No.4

「その息を吹きかけて」

望月奈津子牧師

私の姪がまだ赤ちゃんだった頃、姉は姪を寝かしつけるために、ある行動をしていました。それは「自分の息の音を聞かせる」というものです。赤ちゃんの耳元に近づき、自分の寝息、呼吸の音をしばらく聞かせると、ぐずっていた姪は安心したように眠りについていました。その姿を私は「不思議だな」と思いながら見ておりましたが、よく考えてみますと自分にも思い当たる事があります。幼い頃、怖い夢を見て起きてしまった時、隣で寝ている母の寝息を聞いて少しずつ安心し、眠りに戻りました。また、人はリラックスした時や「ほっ」とした時、大きく息をつきます。「息」を感じることで、私達は安心や慰めを与えられているのかもしれません。

イースターの出来事の中にも、そんな「息」の存在が描かれています。ヨハネ福音書は、復活したイエスが、弟子達の前に初めて現れた時に、弟子達に息を吹きかけたと記しています(20:22)。弟子達はイエスが現れる前、「ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけてい」ました(20:19)。イエスの十字架死を体験し、「自分たちもユダヤ人に殺される」という恐れのただ中に置かれていたのです。しかし弟子達の抱えていた「恐れ」は、それだけだったのでしょうか。家も、仕事も、全てを捨ててイエスに従った彼らにとって、イエスの死は、自分の生きる指針を失う出来事です。神を信頼し、神の御心を求めて生きた者の最期が十字架の死であった、この事実は、弟子達の生きる道を閉ざし、信じてきたものを根底から崩し、生きる意味の見出せない「恐れ」、「苦しみ」を与えていたと想像致します。

その弟子達に対し、復活のイエスは息を吹きかけます。創世記にはこのように記されています。「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた(2:7)」。それは、そこに体となる土があったとしても、神の息が入らなければ人間は生きない、神とつながらなければ人間は生きる者になれないことを意味しています。復活したイエスが弟子たちに吹きかけた息は、もう一度人間が神を想い起こすための息であり、神とつながる

ための息です。神の御心に生きる者の最期が決して「死」では終わらないこと、もたらされる苦しみが苦しみのままで終わらないこと、そこに人間の理解を遥かに超える神の愛が確かに存在することを、イエスはその息を吹きかけて、弟子達に伝えていったのではないでしょうか。

毎週、イエスの復活された「週の初めの日」に集う私たちの中心には、いつも、復活のイエスが立っておられます。私達もまた、様々な「恐れ」の中に置かれ、時に神に従うことに迷い、疑い、神の意志を求めて悩む者です。しかし、神への信頼を再び起こしてくださるイエスの息は、私達にも吹きかけられています。私達と共にいてくださるイエスの息の音、息の温もりを私達の希望とし、このイースターの時から再び歩み出して参りたいと思います。

～2013 年特別講演会「八重の桜だより」感想～

２月３日（日）に、同志社大学神学部教授の本井康博先生をお招きし、吾妻教会特別講演会を開催致しました。当日は、約 95 名の方々が教会に足を運んでくださいました。今回は２名の方に感想を書いて頂きました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

安斎則子

吾妻教会特別講演会で、新島襄研究の第一人者・本井康博先生のお話しを聴けるのは、とても楽しみでした。講演は、２部に分かれ、前半のお話で先生は、２０１３年大河ドラマが「なぜ八重なのか」を様々な視点から語られました。ＮＨＫの番組制作の意図や経済効果を狙った地方の候補者争いなど、大河ドラマ製作の裏事情を垣間見ることができました。

それにしても、２０１３年大河ドラマが、「藤堂高虎」に決まりつつあったのに「なぜ八重なのか」、東日本大震災、福島原発事故の復興支援を第一に考えたＮＨＫの意図は理解できても、福島で歴史に名を残す女性達をさしおいて「なぜ八重なのか」、先生の軽妙な語り口でミステリーの謎が解き明かされていきました。被災地の人々に元気や勇気を与えてくれる「なでしこ福島」は、無名で、不屈の精神を

もって逆境を生き抜いた気骨のある女性、すなわち八重以外にないというものでした。これから大河ドラマで八重がどのように作り上げられていくのか、史実に基づいて書かれた先生の本の中で八重がどのように描かれているのか、ドラマも本も楽しみです。

後半のお話は、襄と八重の生涯を３つのステージに分けて、時代的背景を板書しながら分かりやすく解説していただきました。教育者として、宣教師としての襄の生き方、襄と出会ってからの八重の心の変化、神と八重の関係性など、大変興味深いお話でした。特に、襄が八重を語る言葉、“She is a person who does handsome.”は、心に残りました。この言葉には、聖書の「見えるものより、見えないものを大事にしなさい」の教えがあることを知り、襄の信仰の深さに感銘を受けました。また、八重の「襄のライフは私のライフ」の言葉から、八重が襄の生き方を理想とし、信仰の生活を送ったことが読み取れました。

かつて、戊辰戦争で、スペンサー銃を持って殿に忠誠を誓って戦った八重が、襄と出会い、神に従って生きる道を選んだのは、八重の心の変化ではなく、信仰の対象が、殿かた神に変えられただけではないかと思えてなりません。ボストンでリベラルな教育を受けた“gentleman”と、会津魂を持って信念を貫いた“brave woman”の出会いは、「偶然」というより、心理学者・河合隼雄さんの言葉をお借りするなら、神に導かれた「意味ある偶然」と言えるのかも知れません。最後に、群馬の山の小さな教会に、足を運んでくださった先生に心から感謝します。一日も早い復興を祈りつつ。

川村　晃

先日、知人から「新島襄ってどんな人？」と聞かれ、戸惑ったことがありました。「平和の使い新島襄」群馬県人ならば子どもから大人まで誰もが知る、上毛か

るたの一枚ですが、その方も群馬県人なので、新島襄という名前は当然知っていておかしくないし、教会に通っていない方でも、ある程度どんな事をした人なのか知っているのが当然だと、勝手に思い込んでいたのでちょっとした ショックを 感じました。とは言っても、私自身、新島襄の奥さんである新島八重についてどのくらいの知識を持ち合わせていたかと言うと正直ほとんど何も知らなかったというのが本当のところです。今年、大河ドラマで「八重の桜」が NHK で放送されると聞いた時、とても嬉しく思いました。 そして今回の本井先生の講演会が決まり、その知人にも是非聴きにて欲しいとお伝えしました。

本井先生の講演で印象に残った内容のひとつは、「神戸や長崎は宣教師が伝道をしていった地域ではあるが、ここ群馬は日本で初めて、日本人が伝道を始めた地域だと言っても過言ではない。」と言う事をおっしゃっていた事です。キリスト教という精神文化が他の県に先駆けて日本人によってもたらされた事は誇るべき事だと思います。

また、視点は違いますが、指揮者の大友直人さん（次期群馬交響楽団音楽監督）も朝日新聞にこんな事を書いていました。「沖縄から群馬を眺める」と言うタイトルの中で「群馬県や高崎市と群馬交響楽団の関係は夢のように映る。意外にも我が国は、大都市圏を除いて、沖縄に限らずプロのオーケストラを持っていない地域が殆どなのである。群馬県の文化に対する価値観の高さ誇るべきことである。」

群馬は 47 都道府県中、知名度が最下位だと言う最近のデータがあるようですが、角度を変えて見れば、意外と面白い所だと思うのですが…。本井先生の本「ビーコンヒルの小径」中で、新島襄は様々な面で非常に恵まれていたと記してありました。命の危険も顧みず出国し、ボストンにたどり着くまでの道中、そして神学校を卒業するまでの間、ハーディー夫妻をはじめ多くの支援者がいたこと、そして宣教師として日本に帰ってきて同志社を創設したこと、どの出来事を取っても、そのかげに神様の存在があり、新島襄が導かれていたことを感じました。また、新島襄は教育者として知られていることが一般的であると思いますが、そのアイデンティティは、神様の福音を伝える牧師であったと改めて感じました。

日本キリスト教団　吾妻教会（創立 1889 年 5 月 7 日）
〒377-0801　群馬県吾妻郡東吾妻町原町 444－9　　主任牧師　望月 達朗
℡0279-68-4730　http://www5.ocn.ne.jp/~agatu-ch/　牧　師　望月 奈津子